資料15.1955年7月15日～8月4日夏期捜索行-今井喜久郎著〔文献7,8)〕

資料1955年7月15日～8月4日夏期捜索行-今井喜久郎著浄書

梅雨が立ち去るのを惜しむかの如くに一荒れして終わりを告げ、さんさんたる太陽が顔を出し待ちに待った雪解けも早まってきた7月初旬、今度こそはの念願を心に秘めながらも我々の脳裏には春のあまりにもひどかった雪の量が一寸でも少なくなっているようにと考えると甚だ暗澹たるものがあった。夏期の捜索は7月15日より出発し一応7月一杯での発見を目標として、前半を三重大学が中心となって、後半を岩稜会が中心となって行うことに決定した。7月もまさに終わらんとした31日の午後3時、遂に遺体発見に至り、悲しみの中にも会員一同安堵の胸をなで下ろしたのであった。今回の山行きは人員の入れ替わりが激しく特に発見以後に至っては記録も忠実さを欠いたと思うが、出来る限り正確な記憶を想起しながら日を追って記していこう。

7月15日

名古屋発22時40分長野行準急にて、石岡・毛利(三重大学山岳部)・新井・岩佐等の見送りを後に、南川(三重大学山岳部)・澤田(榮介)・常保(三重大学山岳部)・今井の4名出発する。

7月16日

松本よりバスにて上高地に向かう。上高地に到着しあまりにも雪の少ないのにまず驚く。石原國が北穂から迎えに降りて来てくれていた。この分なら案外早く見つけることが出来るのではないか…と早々にホテルにて荷物をまとめ養魚場を経て出合着が16時ごろなり。直ぐにテントを設営する。途中、澤田の足が痛むらしく心配であったが、やや遅れて追って来た滝川(三重大学山岳部)と石原國に澤田を任せて、南川・常保・今井の三人、先に吹飛ばす。夜に入り相談の結果、澤田は直ぐに又白池へと言う意見であったが、一日置けば足も何とかなるだろうし、本谷から探して行くのが順当であると考えられたので、とにかく見込みのたつまで出合のテントから本谷の捜索を行うことに決定した。

7月17日(快晴)

南川・石原國・滝川・常保・今井にて、本谷を下から詰めてみることにし出発する。素晴らしく良い天気で、クレパスの下を通ってパット外からの光を浴びた時など、まさに目のくらむ位であった。クレパス又クレパス、滝又滝と全然手がかりさえも見られなかったが、最後の滝を越えて昼食後、本谷の上部の雪渓を詰めたところ、五峯下部附近で毛糸手袋、更にその付近でビバ－クの際使用せるビニ－ル袋入りマッチを発見した。(石原確認)帰途、奥又白池に立ち寄ったところ、池に幕営中の東雲山渓会の方々のテントの側に赤錆びになった門田製のピッケルが立てかけてあり、五朗ちゃんのピッケルらしく、石原も確実だと主張したので同会大高氏(石原國はすでに

良く知っていた)等の帰着を待つことにした。やがて大高氏らが帰られ、15日に第二テラスを通過された際に拾われたとの事、及びピッケル残置箇所にケルンを積んで来た等、お話を伺って前記のピッケルを受け取る。帰途、中畑新道にて高原(三重大学山岳部)・毛利と会い、一緒に出合まで下る。夜に入り再び相談した結果、今日探した本谷の様子、池の雪の少ないことなどから、一刻も早くテントを又白池に移し、池をベースとして、本谷上部及びB沢に捜索を集中すべきであることに意見一致し、明日全員にてテントを池に上げることにする。

7月18日(快晴)

昨日に勝っても劣らぬ好天気である。朝食後直ちに荷物をまとめ、かなり重い荷となったが石原國・今井両カメラマン?のモデルを兼ねながら正午少し前くらいに池に到着。テント設営後昼食をとり、午後は休息とする。

7月19日 (曇り時々小雨)

澤田の強硬な意見により、四峯明大ルートに高原・滝川。新村ルートに毛利・南川出発する。石原國はC沢の捜索をも兼ねて、インゼルより明大ルートパーティに指示を与える。新村ルートパーティは取付きが分からず澤田の本谷からの指示も空しく引き返す。常保・今井は五峯の側峯に四・五のコルから取付きカメラを回す。石原國はC沢経由でインゼルに出て、B沢上部を観察するも何も発見できず。明大ルートを登った高原・滝川と四峯頂上で落合い、四・五の雪渓を下る。帰途、本谷雪渓五峯下付近で毛糸手袋を拾う。毛利・南川・常保・今井はB沢左の沢を登り第三尾根に至ろうとするもならず。得ることなくして帰る。

天気も崩れかけて来たので、アタックは到底無理と考えられるので、明日は第二テラスまで登ってみることにしてシュラフに入る。

7月20日(曇のち雨)

毛利・高原・石原國・南川・今井はA沢、第二尾根経由にて第二テラスに向う。V字状雪渓より石原國・南川は第一テラスを通って、毛利・高原・今井は雪渓を詰めて第二テラスに出る。第二テラスにて若山の黒サージオーバー手袋(下山後確認)とビバーク時のローソク(石原確認)を拾う。ピッケル残置地点をカメラに収め、手袋の発見地点にもケルンを積んで、その中にローソクを残して来る。Aフェースを登ってみる予定であったが、カメラを回し終わった途端にすごい夕立に痛めつけられ、がっくりして帰途に着く。第二尾根にてB沢の捜索を済ませて空しく登って来た滝川・常保と落合い、クラストしたA沢を危なっかしいグリセードで下る。今日の捜索により第二テラス及び第一テラス及びその下部の岩場には、発見の見込みはほとんどなし。B沢の雪解けを待って気長に探すしかないのではないかとの結論に達した。この雨が少しでも多くの雪を

流してくれるように、そして一日も早く発見できるようにと念じながら、後ろ髪を引かれる思いにて、毛利・南川・今井下山する。中畑新道にて小坂(三重大学山岳部)に会う。雨の中をずぶ濡れになって急いで下る。雨に濡れた道を滑り滑り駆け下りながら見る本谷の雪も、肩の荷を気にしながら池に登って行った時に比べて、見る影もないほどに少なくなっている。一日も早く、少なくともこの夏中に再びこの道を上がる日の早からんことを願いながら、バスの終車を気にしつつも振り返り振り返り前穂の辺りを眺めるのであった。

7月21日～30日

本谷・B沢の捜索続けるも空し。

7月31日(晴)

夏期の捜索のために池にテントを張ってから早くも半月以上の日が去ってしまった。一体いつまで…いつまで経ったら発見に至るのであろうか。学業の都合もあり、家庭の都合もあって、テントの住人も入れ替わり立ち代わりで幾度そのメンバ－に変更があったであろうか。今日で7月も終わりである。明日になれば最後のピッチを上げるべし。多数のメンバ－が到着する筈である。クレパスに潜り滝を上って、今日まで続けて来た我々の報いは、日焼けした顔と伸び放題に伸びた髪の毛だけなのであろうか…しかしながら今日も捜索は続けられていく。テントに日が差し込むと同時に、朝食を済ませ、2度目いや3度目かの本谷の捜索に向かう。石原兄弟は今日下山することになっている。黒田・長谷川と共に中畑新道を下り、本谷を下部からもう一度探す。最初の滝から黒田・長谷川下山する。石原兄弟はB沢の滝まで行くが、何も得られず空しく引き揚げる。池への帰途、本谷雪渓上部にて休憩中の雪稜山岳会の方にB沢上部の注意をお願いする。15:00頃、先記の雪稜山岳会の山川・本田両氏よりB沢上部にて若山の遺体を発見したとの報せを受け、安堵の暇も無く石岡は直ちに連絡のため上高地に急行する。石原兄弟は早速現場まで登り、雪を掘って遺体を埋め、転落を防ぐためにハ－ケンを打ちビレ－した後、一応池まで帰る。発見はされたものの現在の人数では如何することもならず、下からの人数到着を待って収容作業に当たることに決定せざるを得ない。

神戸にて伊藤記

室と二人で明日出発する予定であったが、明日の昼汽車で行く位なら、今夜の夜行にしようと、大分天気も続いているから、ひょっとしたら今日あたり…と、22時40分名古屋発の長野行準急を約して別れた。19時30分頃、出かけようとして靴を履いた時、電話のベルが鳴った。直感的に上高地から?と受話器を取れば、果たして上高地よりの石岡からで、今日B沢上部で発見されたから、塩三升とプロピルアルコール3本程を持って、直ぐ来てくれ、との事。我々の予感

と偶然に一致したこの報せに一種名状し難い感にうたれた。塩は間に合ったが、アルコールの方がどうしても手に入らぬまま、後の諸連絡は澤田(兄、寿々太郎氏)に依頼して、室と共に家を出た。

遂に発見されたと言う安堵と共に、遺体の様子が心配になり、どうして下ろすかがまた気になってくる。近鉄諏訪駅で、下山した太田と車窓越しに会う。名古屋駅にて上高地に行かれる谷本さん(八高山岳部父の先輩・名大医学部卒・内科医)とお会いし、車中同席する。発車間際になって、三重大の中河先生(三重大山岳部顧問)・南川続いて澤田が、やっと間に合い、皆一緒になった。谷本さんより、いろいろ遺体の処理のご指導を受ける。

8月1日(晴)

朝5時。石原國は昨日の現状連絡のため上高地に急行する。上高地にはすでに昨夜連絡を受けて神戸から伊藤・室・澤田兄、津から中河・南川、松本にて遺体発見を知って直ちに戻って来た黒田・長谷川等が待機していた。直ちに伊藤・室・南川・石原國は池に向け出発する。

途中、新村橋のやや上流で、若山英太氏(若山家4男)と梓ちゃん(姉)に会い話している時、若山富夫氏(若山家3男、跡取り)も来られ、遺体搬出方法を協議する。テントに居る石原兄の意見を持って連絡に下りた石原國の報告「涸沢へ下ろすのが一番安全、かつ遺体に傷がつかず、涸沢小屋をベースにしては?」も聞き、石岡の意見「静かな又白、松高ルンゼを経て、又白出合へ下ろして欲しい」も聞いたが、中々まとまらず、石岡は、「とにかく一任するから石原兄ともよく協議して決めてくれ」とのことで、石岡・若山兄弟はテントへは上がらず、ひとまずホテルまで引き返すことになる。先記4名が池へ上がることになり、15時頃、池テントに到着する。遅れて澤田が上がって来た。

石原兄より遺体の位置を聞かされ、はるかB沢上部を望んで全員黙祷を捧げた後、搬出方法の協議を行う。夕刻18時に至って、ようやくB沢を下降し搬出することに決し、直ちに南川がその旨連絡に下る。同日夜、三重大○(1字不明)木先生、上高地に到着される。

8月2日(晴)

8時朝食後、石原兄弟・室は、遺体の降下収容をより迅速に、より安全に行わんがため、室・石原國はB沢を上り、下降の通路を選定し、必要な確保用のハーケンを打ちフィックス(岩場・難所で安全確保のためにロープを固定したままにして置くこと)をしつつ現場まで行き、石原兄はB沢より良ければC沢にするため、C沢の偵察をしながら現場まで行く。伊藤・澤田は本谷よりB沢のスケッチ及び落石の看視と、その経路の確認に当たる。10時頃、南川・長谷川の両名、テントに来る。出合に意外なほど人数の少ないのに驚くと共に、後発隊の連絡如何と、心配になっ

てくる。14 時頃、フィックス完了し先記 3 名、池に帰って来る。17 時過ぎ、"アラョッ"の声と共に松田がスノ－ボ－トを背負い、高井(兄)・新井・黒田・常保等が上がって来た。人員は揃った。これでよし、非常に心強い。直ぐに協議を行い、明日早朝から遺体の搬出にかかり、B 沢松高ルンゼを経て、出来るだけ早く下ろすことを決定する。今井・黒田連絡のため出合に下る。一方、上高地の石岡・中河・鈴木・北川・岩佐及び親戚の方々は、出合まで上がり、明日の火葬の準備を行う。尚、上高地ホテルのクレさん他 2 名の方々、及び営林署の方も火葬に用いる木材等の伐採のため、出合付近まで上がって来てくださる。夕方より風強くなり曇ってくる。

8 月 3 日(曇一時夕立のち晴)

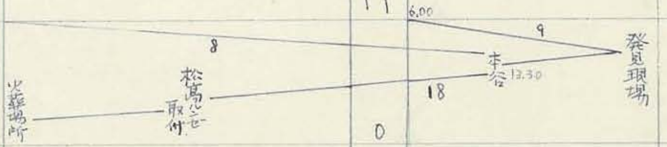
ややガスがかかっているが、別段作業にさしつかえることはなく、かえって落石を防ぐためには好都合の天候である。6 時、石原兄弟・松田・室・高井・新井・南川・常保・長谷川の 9 名は遺体を運ぶためのスノ－ボ－トを背に、池を出発する。同時刻、出合より石岡・中河・岩佐・黒田・今井の 5 名は池に向け出発する。上記 5 名が池に到着した頃。先記 9 名は既にインゼル上部に達しており、昨日打ったハ－ケンを頼りに、確実な足取りで登って行くのが見られた。時折晴れるガスの合間を縫って、一つ又一つと落石の音が不気味に響いてくる。池に泊まった伊藤は本谷上部のガレ場にて、搬出作業の記録と状況の撮影に当たる。

ちょうど B 沢が上部岩場からの落石の通路になっているため、作業は非常に危険な状態の下で行われている訳である。正午少し前、上高地にテントを張っておられた名古屋大学山岳部の方が 3 名応援のために上がって来られた。やや遅れて滝川が上がって来た。実習先からかけつけたそうである。作業は、B 沢下部の二つの滝によって非常に難航したが、リ－ダ－石原兄の指揮の下に着実に進行し、無事に二つの滝を降下して、13 時過ぎ、本谷上部のガレ場に達した。其処で昼食を済ませて、池に居た他のメンバ－も加わり、本谷を松高ルンゼ降り口に向って一直線にトラバ－スしながら下降を続ける。折悪く猛烈な夕立に襲われ、全員ビショヌレになりながら、懸命にザイルにしがみついていく。松高ルンゼ降り口に達した頃には雨も止み、上部からのビトンあるいは木立によるビレ－に、急斜面ということも手伝ってか、下降の速度は急激に早まる。30 もしくは 40m のザイルいっぱいになるまで急下降させ、幾ピッチ続けたことであろうか…全員疲れのためか、スピ-ドも下に行くほどなくなり、松高ルンゼ取付きへ着いたのは 21 時過ぎであった。取付きにて検視を行うとの事、全員あまりの空腹のため食事を摂り、再び本谷を下降する。真昼のような月の光と、ラテルネの光を頼りに、何の事故もなく難場を通り抜けたのである。火葬場所に到着したのが 22 時を少し過ぎていた。既にあつらえられた祭壇の前に全員集合し、しめやかな読経の声と共に、再び悲しみも新たに、今は亡き五朗ちゃんの霊安かれと祈りな

がら、永遠の別れを告げる。木の間からもれる月の光が、異様なまでに明るく、居並ぶ人々にその影を落とし、白い河原の上に立つ前穂高の峰々も、もう安らかな眠りに入ったのであろうか…ただ黒っぽいスカイラインをクッキリと夜空に投げかけていた。

８月４日(晴)

夕刻、家族の方々の胸に抱かれて、五朗ちゃんの遺骨、山を下る。

月・日・天候	出合人員		池人員		備考
7、15. (晴)					名古屋22.40発長野行にて5名発.
7. 16. (晴)	6				出合まで荷揚げしテント設営.
7. 17. (快晴)	8	⇄			本谷捜索, 夕刻 高原・毛利 来る。 池にて五朗ちゃんのピッケル受取る。
7. 18. (快晴)		→	8		池にテントを移す.
7. 19. (曇時々雨)			8	⇆ 明大ルート ⇆ B沢. ⇆ 本谷	高原・滝川 明大ルートを登る 石原 B沢 捜索 その他本谷上部 B沢の右の沢を登る.
7. 20. (晴後雨)		← 毛利・南川・今井 帰る.	7	⇆ 第一第二テラス ⇆ B沢	石原B・南川第一テラスを経て第二テラスへ 高原・毛利・今井. V字状雪渓より第二テラスへ登る。滝川・栄保 B沢より第二尾根へ登る。 午後小雨来る.
8. 1					
8. 2 (晴)			11		
8. 3 (晴・夕立)			0		
8. 4 (晴)					遺骨下る.
8. 5 (晴)					
8. 6					現場調査
8. 7					

夏期捜索行

梅雨が立去るのも惜しむかのごとくに一荒れあれて終りを告げ、さん〱たる太陽が顔を出し待ちに待った雪解けも早まって来た七月初旬 今度こそはの念願を心に秘めながらも去年の悩哀には春のあまりにもひどかった雪の量が一寸でも少くなっているようにと考えると甚だ暗たんたるものがあった。夏期の捜索は七月十五日より出発し一応七月一杯での発見を目標として前半を三重大学が中心となって、後半を岩稜会が中心となって行うことに決定した。七月も正に終らんとした三十一日の午後三時遂に遺体発見に到り悲しみの中にも会員一同安堵の胸をなでおろしたのであった。今回の山行は人員の入操りがはげしく特に発見以後に到っては記録も中心を失したと思うが出来る限り正確な記憶を想起しながら日を追って記していこう。

七月十五日 名古屋発二三、四〇長野行にて 石岡、毛利、新井、岩佐等の見送りを後に南川、沢田、[redacted] 常保、今井の四名出発する。

七月十六日 松本よりバスにて上高地に向う。上高地に到着しあまりにも雪の少いのに先ず驚く。石原氏が北穂から迎えに降りて来てくれていた。二、三分なら案外早く見付けることが出来るのではないか……と早々にホテルにて荷物をまとめ養魚場を経て出合着が十六時頃なり直ぐにテントを設営する。途中沢田の足が痛むらしく心配であったがやゝ遅れて追って来た滝川と石原氏は沢田を伴せて、南川、常保、今井の三人先に吹飛はす。夜に入り相談の結果、沢田は直ぐに又白池へという意見であったが、一日遅ければ沢も何とかなるだろうし、本谷から探していくのが順当であると考えられたのでとにかく見込みのたつまで出合のテントから本谷の捜索を行うことに決定した。

七月十七日（快晴） 南川、石原は、滝川、常保、今井にて本谷を下からつめてみることにし出発する。素晴らしい天気でクレバスの下を通ってパット外からの光を浴びた時などまさに目のくらむ位であった。滝又滝 クレバス又クレバスを 全然手がかりさえも見られなかったが最後の滝を越えて昼食後本谷の上部の雪渓をつめたところ五六峯下部附近で天気は手代わり更に

その附近でビヴァークの際、使用すビニール袋（ツエルト）を発見した（石原確認）帰途又白池にてテントを張って見えた東雲山渓会のテントの側に赤錆の内田のピッケルが立てかけてあり、五朗ちゃんのピッケルらしく石原も略確実だと主張したので大高さん（既に日本さんはよく知っていた）弟の帰着をこばって待つことにした。やがて大高さん弟が帰られ、（昨日（十五日）第二テラスを通過した際に拾われたもの）又ピッケル残置せ所にケルンを積んで来た弟が話しをうかがい、前記のピッケルを受取る。帰途中畠新道にて高原、毛利と会い、一緒に出合まで下る。夜に入り再び相談した結果、今日探した本谷の様子、池の雪の少いことなどから一刻も早くテントを又白池に移し、池をベースとして本谷上部及B沢に捜査を集中すべきであることに意見一致し、明日全員にてテントを池に上げることにする

七月十八日（快晴）昨日に勝るとも劣らぬ好天気である。朝食後直ちに荷物をまとめ、かなり重い荷となったが石原は、今井両キャメラマンのモデルを兼ねながら正午少し前後に池に到着 テント設営後昼食をとり、午後は休息とする。

七月十九日（曇時々小雨）沢田の強硬な意見により四峰明大ルートに高原、滝川、新村ルートに毛利、南川出発する。石原にはC沢の捜索をも兼ねてインゼルより明大ルートパーティーに指示を与える。新村ルートパーティーは取付きが分らず沢田の本谷からの指示を要求し、引返す。常保、今井は五峰の側峰に~~[illegible]~~四五のコルから取付きカンテを回す。石原はC沢経由でインゼルに出て、B沢上部を観察するも何ら発見出来ず、明大ルートを登った高原、滝川と四峰頂上で落合い、四五の雪渓を下る。帰途本谷雪渓五峰下附近で毛糸の手袋を拾う。毛利、南川、常保、今井はB沢左の沢を登り第二尾根に到らんとするもなんら得ることなくして帰る。天気もやや崩れかけて来たので、アタックは到底無理と考えられるので明日は第二テラスまでとにかく登って見ることにしてシュラフに入る。

2の3

七月二十日（曇後雨）毛利、高原、右京は、南川、今井はA沢、第二尾根経由にて第二テラスに向う。V字状雪渓より右京は、南川は第一テラスを通って、毛利、高原、今井は雪渓をつめて第二テラスに出る。第二テラスにて若山の黒サージオーヴァ手袋（下山後確認）とビヴァーク時のパーック（右京確認）を拾う。ビニール残置地点をカメラに納め、手袋の発見地点にもケルンをつんでその中にパーックを残しておく。Aフェースを登ってみる予定であったがカメラを回し終った途端にすごい夕立に痛めつけられがっかりして帰途につく。第二尾根にてB沢の捜索を済ませ空として登って来た滝川、岸保と落合いクラストしたA沢を危つかしいグリセードで下る。今日の捜索により第二テラス及第一テラス及その下部の岩場には発見の見込み殆んどなし。B沢の雪解けを待って隊長に探すより仕方がないのではないかとの結論に達した。この雨が少しでも多くの雪を流してくれるようにそして一日も早く発見出来るようにと念じながら後髪を引かれる思いにて毛利、南川、今井下山する。中島新道にて小坂にあう。雨の中をズブぬれになって急ぎ下る。雨にぬれた道を滑り〳〵かけ下りながら見る本谷の雪も肩の荷を気にしながら池に昇って行った時に比べて見る影もない程に少くなっている。一日も早く少くともこの夏中に再びこの道を上る日の早からんことを願いながらバスの発車を気にしながらも振りかえり〳〵前穂の辺りを眺めるのであった。

七月三十一日(晴) 夏期の捜索のために池にテントをはってから早くも半月以上の日がたってしまった。一体いつまで…… いつまで経ったら発見に到るのであろうか、学業の都合もあり、家事の都合もあってテントの住人も入れ替り立替りで幾度そのメンバーに変更があったであろうか 今日で七日も終りである。明日になれば最後のピッチを上げるべし 学部のメンバーが到着する筈である。クレバスにもぐり滝を上って今日まで捜しに来た吾々の殺[illegible]りは日焼けした顔を伸び放題に伸びた頭の毛だけなのであろうか……しかしながら今日も捜索は続けられていく。テントに日がさしこむと同時に朝食をすませ二度目いや三度目かの本谷の捜索に向う。石原一、石原に[illegible]は今日下山することになっていた黒田、長谷川もともに中畠新道を下り、本谷を下部からもう一度探す。最初の滝から黒田、長谷川下山する。石原兄弟はB沢の滝まで行くが何も得られず空しく引揚げる。池への帰途本谷雪渓上部にて休憩中の雪稜山岳会方にB沢上部の注意をお願する。

一五〇〇頃 先記の雪稜山岳会の山川、赤田両氏よりB沢上部にて吾山の遺体を発見したとの報せを受け、安堵の暇もなく石岡は直ちに連絡のため上高地に急行する。石原兄弟は早速現場まで登り雪を掘って遺体を埋め、転落を防ぐためにハーケンを打ち、ビ[illegible]レーした後一応池まで帰る。発見はされたものの現在の人数では如何することもならず下からの人数到着を待て捜索作業に当ることに決定せざるを得ない。

八月一日(晴) 朝五時、石原は昨日の状況連絡のため上高地に急行する。上高地にはすでに昨夜連絡をうけて神戸から伊藤、室、沢田、津から中河、[redacted]、南川、橋本は遺体発見を知って直ちに戻って来た黒田、長谷川らが待機していた。直ちに伊藤、室、南川、石原は池に向け出発する。沢田もやゝ遅れて池へ到着する。池テントで協議の結果、遺体はB沢を下すことに決定し、直ちに南川は第七回連絡に下る。

八月二日（晴）石原兄弟・室は遺体の降下場所より迅速に安全に行われんがためにB沢を上り下降の通路を選定し、安全な確保用のハーケンを打ちに行く、午後昨日連絡に行った南川、早朝上高地に向った 夕刻松田・高井・新井・常保池に到着する。同晩に連絡のため黒田・今井池まで上り、明日の作業予定など伝達後直ちに出合まで下る。一方上高地の石岡・中村・鈴木・北川・岩佐及親籍の方々は出合まで上り、明日の火葬の準備等を行う。なほ上高地ホテルのクレさん他二名の方々が火葬に用いる材木等の伐採のため出合附近まで上って来て下さる。池[redacted]での葬儀はより、明日早朝から遺体の搬出に取かかり B班、松高ルンゼを迂回して 出来るだけ明日中に火葬場所まで下ろすことに決定する。

八月三日（晴）やゝガスがかかっているが作業には別段さしつかえることはなし。落石を防ぐためにはかえって好都合の天候である。午前五時石原兄弟・松田・室・高井・新井・南川・常保・長谷川の九名は遺体を運ぶためのスノーボートを背に池を出発する。同時刻出合より石岡・中村・岩佐・黒田・今井の五名は池に向け出発する。池に泊った伊藤は本谷上部のガラ場にて搬出作業の記録及状況の撮影に当る。上記五名が池に到着したころ、先記九名はすでにイーゴル上部に達して居り、昨日打ったハーケンをたよりに確実な足どりで登って行くのが見られた。時折はガスの間をぬって一つ又一つと落石の音が無気味に響いて来る。丁度B沢が北壁、右岸稜からの落石の通路になっているため作業は非常に危険な状態におかれて行われているわけである。正午少し前上高地にテントをはっておられた名大の山岳部OBの方が三名応援のため上って来られた。搬出作業はB沢下部の二つの滝によって非常に困難を極めたが、リーダー石原の指揮の下に着実に進行し、無事二つの滝も降下して午後一時過ぎ本谷出合の雪渓に達した。B沢直下のガレ場で昼食をすませ、池に居た残りの人のパーティも加わり本谷を松高ルンゼ下部に向って一直線にトラバース

それから下降を続ける。折悪しく、猛烈な夕立におそわれ、全員びしょぬれになりながら懸命にザイルにしがみついている。松高ルンゼ下りには達した時には雨もやみ、上部からのピトン、或は立木によるビレーに急斜面をいつこに米半位つてが懸下降り速度は早まる。三〇もとは四〇米のザイルの一杯に伸すまで急降下させ、幾ピッチつゞけたであろうか、全員疲れのためか、スピードも下へ行く程おとれり松高ルンゼ取付へ到着したのは九時近くであった。墨のような闇の中をラテルネの光を頼りに何の事もなく無事に難場を通り抜けたわけである。取付にて松租を行うこととし、全員あまりにも空腹なため食事を済ませ、雨で本谷を下降して火葬場所に到着したのが十時をすこし回っていた。すでにあつらえてられた祭壇の前に全部員集合し、しめやかなる読経の声とともに、雨も悲しみも新たに、今は亡き五朗ちゃんの遺稿を飾り、永遠の別れを告げる。木の間からもれる光をなす月の光が墓標をほのかに明るくし、立ち並ぶ人々には影を落とし、白い河原の上に立つ前穂高の山々ももうとっくから眠りに入ったかのように、たゞ黒っぽいスカイラインをなげかけていた。